ベクヴェーム・カンタリベ

月並

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ベクヴェーム・カンタリベ

【Ｎコード】
Ｎ７１４６Ｉ

【作者名】
月並

【あらすじ】
それは世界が幻想や伝承、ファンタジーに飲み込まれた世界の話。日本のとある島で、３０人の人々が一冊の本を囲んで、それぞれ物語を語っていく。英雄伝、珍奇話、自伝に伝記、退屈な時間を紛らわせるために、人々は今日も夕暮れ時に寄り添う。

第一章　総序（前書き）

カンタリベシリーズの中の一作です。
同じ世界観で、イミテシオ・カンタリベ、イネスタ・カンタリベが掲載予定です。

第一章　総序

海の向こうの、小さな島から立ち昇る煙が
水の中に落とされた墨のように空に広がり
硫黄の臭いをかき消す潮の香りが
山の憂いなど気にかけぬように港を満たし
船着き場に集まった猫が、漁師の獲った秋刀魚や目鯛のおこぼれにあずかろうと
可愛げにねうねうと鳴く夕時の頃
娯楽を故郷に置いて来た人々は何かないものかと
よそよそしげに辺りを散策して
結局なにも見つけることはなく
それでも時間に追われていた今までから解放されたことに
気付かぬほどの小さな安楽を覚える

それは夏を終えて、ほのかに肌寒くなった秋
日が沈みかけた頃には長袖を欲するようになり
空が燃えるような紅に染まる刻には
灯りの少なくなった港から人々の足音は消えていく
漁船の音と夜の漁に出る男達が
ちらほらと黄昏の港に現れ始める刻には
家々からこぼれる光は、淡やかな灯りのように島を映す

ちょうどこのような時に
人々は退屈しのぎと良き時間のために
身の上や、人から聞いたことなどを
話したり聞いたりしたくなるのである。

皆様がいらっしゃいますのは、世界が幻想伝承に飲み込まれた世

でございます。

西暦で申し上げるならば２０２０年。皆さまの世界と大差なかったこの世界が、魔法の世に変貌してから大よそ８年後のことです。大きな混乱と争いを経て、世界は２０世紀以来有り得なかった平和を迎え、争いは最小限にとどまっておりました。といいますのも、変貌直後の大戦争によって、大義名分を得たかの帝国が世界を蹂躙し、ほとんどの国を自らの支配下に収めてしまったからなのです。おかげさまで、世界は以前よりも穏やかに収められております。

そんな世の日本という国、とある島、つまりここのことですが、に２７人の日本人がおりました。彼らは別の島の住人なのですが、火山の噴火のせいで事が収まるまでここに避難するはめになった方々なのです。

私はこの小さな避難所を提供した者で、昨日の晩からこの畳部屋を２７人の寝室として使って頂いております。

ここは普段は町の集会に使われる大広間で、２７人でも十分に入れるほどに広いものでした。出入り口である襖の向かい側、つまり西側には祖父の代からある掛け軸がかけられ、北には小庭を眺められる窓がありました。かけじくの隣には押入れがあり、そこにはたくさんの本や、頂いたは良いものの使いどころに困る物なんかを入れてありました。南側は何も無いのですが、隣が台所でしたので、夕方に壁に耳を当てると妻や母の楽しげな声がくぐもって聞こえてきました。掛け軸のすぐ前の畳には豆粒ほどの黒い点がありました。これは昔、私が電気の引き紐を悪戯で燃やし、その焦げが畳に落ちたものであります。親にこっぴどく怒られたのをよく覚えております。

普段はここはとてもすっきりしておりますが、２７人もいらっしゃると合宿さながらに荷物が積まれ、倉庫か何かに見えました。それでも、夜には布団が敷かれ整然としており、それは静かでありながらどこか壮観なものでした。初めはそんな様子に少し驚きました

が、日が経つごとにそれも薄れていきました。

皆さんがいらっしゃって大よそ9日ほどになります。私の家は少しばかりの余裕がありますので、お泊り頂く分は全く問題なく、賑やかになることは嬉しいことでした。この島はそういう人々がたくさん居ますので、他のお家でも同じようなものだったでしょう。

ただ、少し困ったことがございます。それは皆さんが退屈し始めているということです。働いている方はこの島からお仕事に向かったりしているので良いのですが、他の方々は島の中に缶詰です。家事のお手伝いをしてくださったり、島を周ってみたり、この島で出来ることと言えばその程度です。テレビはマスコミ嫌いの母の意向で置かれておらず、眼光から逃れられた者は精々新聞くらいのものでした。

お勉強であったり、流行りのゲームであったり、普段しないような読書であったり、そのようなものでも退屈になってしまうことは仕方のないことでございます。皆さんは私に気を使って頂いているようで、そのような不満は全く口にしませんでしたが、真っ赤に熟した林檎が「僕はまだ酸っぱいよ」と言っているようで、どうしてもわかってしまうのです。私が顔を読むjのが上手いからではありません、今後のお山への不安もあるようで、皆さんのお顔は緩くなっていたのです。

そこで、私は一計を案じることにいたしました。それを思いつくまでに、私は多くの時間を使いました。このような退屈に対しては、簡単なゲームは気休めにしかならないでしょう。まして、27人もの方々と一緒に遊べるゲームなんて、商品付きのビンゴゲームしか思いつきません。そんな一過性のものではいけません。かと言って、遠出するような場所もなく、皆さんの大方は行ったところをもう一度行くぐらいしか出来ません。そして、時間をたくさん使うものでなければなりません。となれば、私が思いつくのは一つだけでした。

日が落ちて夕闇が飲まれ始める頃、私たちは夕食とお風呂を済ませ、デザートのスイカを食べておりました。皆が円になり、色々と話をしながら時間を過ごしておりました。四日ばかりの連続休暇に入る前夜でしたので、幸い２７人全てがその場にいらっしゃいました。

ががやと賑やかになり、時折笑い声なんかも聞こえました。この時間だけは退屈を忘れられる、大事な時間でした。

「ご主人ご主人、さっきから気になっていたんだけど、その本は何なんだい？」

スイカを食べ終わった初老の方が、円の中心に置かれていた白地の本を指さして言いました。この方が来る前に何度か同じ質問をする方がいらっしゃったのですが、私はその時は答えませんでした。と言いますのも、まだ全員が集まってはいなかったからです。

「そうですね、それでは頃合いなのでそろそろお話しましょう」

私は母と妻を呼んで、３人で円の中に加わりました。

「さてさて皆様、まずはこれをご覧ください」

そうしてこの厚い装丁の本を手にとって、私はペラペラとその本を皆さんに向かってめくり、同時に驚きと笑い声が沸きあがりました。

「ご主人、ここに囲炉裏は無いよ」

その冗談に、さらに笑い声が大きくなりました。私は注意を引くように、わざとらしく咳払いをしました。

「さて皆さん、ご覧の通りこの本は真っさらです。表紙だけじゃなく、本の中身も真っ白でございます。これは印刷会社に勤める私の友人に少し気を利かせてもらって作ってもらった白本の内の一冊です」

「他のは日記帳にしたの？」

「ご名当」

お子さんの意外な推理力に感心するように、驚きの声が漏れました。

「そしてこの本には、これから語られるであろうお話を書かれることになります。その物語は、まだ私は知りません。と言いますのも、お話する人も、まだ何を話すのか決めていないからなのです」

私がここまで言うと、勘の良い方が表情を緩ませました。その方に続いて、何人かが私の次の言葉に大よその見当をつけたようでした。その方たちの反応がいずれも口元を緩めるというものだったので、私は少し安心し、胸を張って言葉を続けました。

「そう、お話をするのは皆さまです。ここに居る方々がそれぞれ好きな物語を二つほどお話しして、一冊の本にまとめるのです。お話は物語であればなんでも結構、身の上話、他人から聞いた話、昔から伝わるお話しなんかでも構いません。それをお話しして頂いた後に、その物語をこの本に書いて頂きます。勿論、まるまる書くのは疲れると思いますので、一ページか二ページほどの簡単な概要や箇条書きで十分です。この本は皆さまが読み返すために書かれるからです。一度話を聞いた人だけがわかる本なのです。なんとも素敵なものでしょう？　誰しも一つや二つ、お話し出来ることはあると思います。お話しが苦手な方も安心してください、私はこれでも口が上手いので、ひょいひょいと言葉を引きずり出して御覧に入れます」

この言葉を投げかけた数人は私の目配せに気付いてか、困ったような笑いを浮かべて見せました。辺りを見回すと、特に嫌な顔をしている人は居ませんでした。私はうんと頷き、少し大げさ目に手を広げて見せました。

「私はこの本を彼のイングランドの詩人、チョーサーの作品『カンタベリー物語』を文字った『カンタリベ』、つまり語り部と名付けたいのですが、この小粋な洒落はいかがでしょうか？」

周囲から拍手が送られ、「いいぞ」「賛成！」「いいセンスだ！」と私を喜ばせる声が上がりました。

「ちなみに、このカンタリベというのは私の考えたものではございません。私の友人が誰かから聞いたものを、私がそのまま拝借したものであります。さきほどの拍手はその誰かに送ってください。は

い、ありがとうございます。さて、皆様の意欲を掻き立てる為に、最も皆を楽しませた方に贈られるちょっとした賞品を紹介しようと思います。ここに居るのは全員日本人ですので、一人だけ豪華な食べ物をもらったり、お金になるようなものを貰ったりしても少しバツが悪いと感じる方ばかりでしょう。では、私は一体何を差し上げるべきでしょうか？　長いこと考えた結果、私は賞品を『晩御飯を自由に決められる』権利を差し上げようと思っております」

拍子抜けしたような、和やかな笑い声がこだましました。しかしながら、これを思いつくのに私は多くの時間を要しました。なにせ２７人も居るのですから、全員の意に沿えるようなものはほとんど無かったのです。

「満漢全席のようなものはご勘弁いただきますが、少し珍しい外国の料理なんであれば、私たちは一生懸命奔走し、まさしく『御馳走』を皆様に提供する心意気です。遠慮は要りません、なにせこれを求める方はここに居る全ての人を楽しませるような方でしょうから、それぐらい安いものなのです。ちなみに、審査は皆さまの声で決めようと思いますが、混乱があってはいけないので最後に決定するのは私とさせていただきます。開催は明日の夕暮れ時からで、数日に渡って続けようと思います。ですので、各々の用事は夕暮れまでに済ませてください。参加出来ない時間が出来てしまう方もいらっしゃいますので、その方には私から直接、聞けなかったお話しをさせていただこうと思います。さて、私からのお話は以上になりますが、何か疑問や不満などはありますか？　無いようでしたら、皆さまには同意の証として、この本にお名前をお書きください」

少し意外でしたが、２７人全員が快く私の提案を受け入れてくださいました。何人かはお話しが出来るか不安であったり、出れる日が少なくて不満だったりという方もいらっしゃいましたが、参加を拒否するほどのものでは無かったようです。最初の入りにしては上出来でしょう？

１５分ほどで、全ての方が本に名前を記入し終えました。綺麗で

あったりがっしりとしていたり、グニャグニャであったりグズグズであったり、歪でありながらも愉快な表紙が、私と母と妻のそれぞれの一筆によって完成しました。

各々がさてどうしたものかと頭を捻らせたり、冗談を言って大笑いしたりしました。

ひとまずは大成功です、これで皆さまの暇つぶしは良く出来るでしょう。話される物語はどれもが新鮮なものに違いありません。と言いますのも、ここに居る皆さまのほぼ全てが、まったく違う人生を歩んでおられるからです。

勿体つけずにさっさと話せという声が出ている頃だと思いますので、此処に集った27人についてご紹介させて頂きます。これで明日までの時間を潰すことにいたしましょう。なにせ27人という大人数でございますので、かなりページが稼げることでしょう。それを期待して、私はこれから出来るだけダラダラと皆様について、知っている限りのことを書き綴るのでございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7146i/

ベクヴェーム・カンタリベ

2010年10月9日03時04分発行